

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ポスト社会主義民族誌の可能性：
市場化における生産と仕事をめぐる位相：
モンゴル牧民社会における郊外化現象：
ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現関する試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾崎, 孝宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001260

モンゴル牧民社会における郊外化現象

——ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現に関する試論——

尾崎 孝宏
鹿児島大学法文学部

1990年代前半にモンゴル国で起こった社会主義の崩壊は、現地の牧民社会に対して家畜所有および移動ルート・居住地選択の自由という、「ポスト社会主義」的と形容可能な状況を招来した。だが、モンゴル牧畜社会において社会主義崩壊直後に発生した変化が自給性の高い生活形態への「撤退」であったのに対し、21世紀に入ってから、むしろ流通システムの再構築に基づいた都市空間とのリンク強化など、部分的には社会主義時代にも類似した、1990年代の「ポスト社会主義」的状況とは一線を画する現象が発生しつつある。

筆者はこうした現状をポスト「ポスト社会主義」的状況と名づけ、本論では特に、単なる社会主義時代への回帰現象としては理解し得ない「郊外化現象」、つまり都市的空間の近郊に家畜放牧による自立的な生活が可能となる牧民が集中する現象に関して分析を試みる。具体的には、ボルガン県ボガト郡に住む1人のポスト「ポスト社会主義」的牧民とその社会圏を事例として検討を行う。

- | | |
|------------------------|-----------|
| 1 「ポスト社会主義」概念をめぐって | 4 牧民の生活実態 |
| 2 モンゴル牧畜社会にとってのポスト社会主義 | 5 郊外牧民集落 |
| 3 フィールド概要 | 6 考察と展望 |

*キーワード：モンゴル、牧民、郊外化、ポスト社会主義

1 「ポスト社会主義」概念をめぐって

1990年代前半、モンゴル国で起こった社会主義の崩壊は、現地の牧民社会に対して2つの意味で大きなインパクトを引き起こした。1つは、家畜の集団所有制度の崩壊にともなう家畜所有の自由であり、基本的に誰でも、持ちたいだけの家畜を所有することが可能となった。もう1つは、ネグデル（農牧業協同組合）による指導体制の崩壊に起因する季節移動ルート・居住地選択の大幅な自由度の拡大であり、個々の牧民がどこで、どのように牧畜を行うかは、基本的に個人の裁量権に委ねられるようになった。

こうした現象は、社会主義崩壊後に発生した現象という意味で「ポスト社会主義」的であると形容可能である。しかし近年、ポスト社会主義という概念設定に疑義が呈される事態も生じ、何らかの注釈なしには使用し難い客観的状況が生じつつあることに加え、

筆者自身、タイトルで示したように「ポスト『ポスト社会主義』」なる、複雑な用語法を想定している以上、「ポスト社会主義」という概念をめぐる近年の議論を概観した上で、筆者自身のポジションを示す必要があるだろう。

改めて論じるまでもなく、「ポスト社会主義」は、1991年暮れのソ連崩壊に端を発し、「人類の壮大な歴史の実験であったソ連の社会主義体制の評価と、社会主義体制崩壊後の旧社会主義国家の行方」（佐々木 1998: 6）を見定めようとする研究テーマとして出現した、多様な研究分野に関わる問題関心を指し示す用語であったと思われる。しかし、当のソ連崩壊から10年以上を経て、ポスト社会主義という概念の新鮮さが失われつつあったと思われる2000年代の前半に入り、その概念設定に対する違和感が表明され始める。

例えば佐原は、2004年に刊行された「ポスト『ポスト社会主義』への視座」と題する論文で、「ポスト社会主義」という枠組みの限界性、つまり多様な地域の多様な現象を「ポスト社会主義」という概念で括ることで理解したつもりになってしまえる危険性を指摘している（佐原 2004: 19）。またモンゴル国の宗教状況を研究する滝沢は、先述の佐原の議論を引用し、「各地域を個別に見ていくと『ポスト社会主義』とは、もはや地域ごとの個別の歴史における単なる時代区分に過ぎないようにも思われる」と述べつつも、宗教研究における「ポスト社会主義」という視座の意義を最終的に指摘する（滝沢 2006: 112-113, 279）。

つまり、通文化的概念として「ポスト社会主義」という用語を使用する場合、現状ではすでに何らかの限定やエクスキューズなしには使いにくくなっているといえよう。もちろん、ウランバートル市の「起源」に関する歴史叙述について社会主義時代とポスト社会主義時代の比較を行った西垣（2005）の研究のように、個別の歴史における単なる時代区分として「ポスト社会主義」を使用することは、いかに通文化的な枠組みとしての問題点が指摘されようとも現在なお有効な用法であろうし、むしろ現在のな使用方法としては至極健全であるともいえる。

ただ、時代区分としての「ポスト社会主義」の使用についても、もちろん全く問題点が存在しないわけではない。概念としての斬新性とは別に、一体いつまでポスト社会主義時代という時代区分が持続しているのか、つまり現在の現象にもまだ「ポスト社会主義時代の」というラベルを貼ることが有効なのか、という次元での「有効期限」を検討する必要があるだろう。無論これは、地域や対象ごとに一様である必要はない。それでは、筆者がこれから議論するモンゴルにおける牧畜の文脈ではどのように考えられるだろうか。その際、筆者はこの「ポスト社会主義」という、人々に通文化的な適用可能性を喚起し、ひいては通文化的な共通性の存在を想起させてしまうような名付け自体がナンセンスだったのではないかと、という疑念には反対する立場から、以下ではモンゴル牧畜社会にとってのポスト社会主義について検討したい。

2 モンゴル牧畜社会にとってのポスト社会主義

モンゴル牧畜社会における社会主義崩壊は、ほぼネグデルの解体を意味した。社会主義時代、モンゴル人民共和国（当時）には国营農場に相当するサンギーン・アジ・アホイと前述のネグデルが存在した。ただし、サンギーン・アジ・アホイが農業を中心としていたのに対し、多くのネグデルは牧畜、しかも集団化以前の面影を色濃く残した移動牧畜を主たる産業としていた。1990年代前半に行われたネグデルの解体に際し、かつてのネグデル構成員には家畜が分与され、また失業の危機に瀕した定住地域の住民も何らかの方法で家畜を入手することによって、自営牧民の集合体としてのモンゴル牧畜社会が出現することとなった。

ネグデル解体後、1990年代のモンゴル牧畜社会は、統計でも明らかのように国家レベルの顕著な家畜頭数増加を経験すると同時に、現場レベルでは社会主義時代に存在した物資やサービス、流通網やインフラなどが軒並み消失するという、国家レベルでの経済混乱の影響をまともに受けた形での生活の困窮化が見出された。つまり、国家レベルでの家畜頭数増加は、単に家畜私有化というインセンティブによって牧民の意欲が高まった結果というだけでなく、社会主義時代のように年々大量の家畜をロシアに輸出しなくなった、あるいは輸出できなくなった結果であるとも理解可能な現象であった。

現に、当時の牧民の生活は家畜との物々交換によって必要な物資を入手し、家畜はインフレに強いので手放すことを望まず、また入手可能な物資のパリエーションも当時物不足に喘いでいた首都ウランバートル以上に乏しかった。そのため、彼らの生活は自らの所有する家畜から肉や乳製品を得て食糧とする度合いの高い、つまり自給傾向の強いものであった¹⁾。

ただし、この1990年代的な牧民社会の自給的傾向は、そのままの形で現在に至るわけではない。それはいみじくも、佐々木（1998：14-15）がシベリア、サハ共和国北部の先住民の狩猟に関して1990年代半ばに見出した「生活のための自給的な狩猟の比重の高まり」について「完全な自給化をめざしているのではなく、一種の緊急避難的な状況である」と評した状況と軌を一にする。モンゴルにおける変化のきっかけの1つは、2000年に始まる全国規模のゾド（雪害）である。このゾドにより、モンゴル国の家畜頭数は2002年には1989年と同じ水準まで激減し、これにより家畜を失った牧民を中心に、ウランバートルへの人口流入が加速する。

一方、ほぼゾドと同時期、つまり21世紀初頭より顕著となる現象として、モンゴルにおける鉱山開発ブームがある。もちろん鉱山開発自体は、牧民社会とは直接的なリンクを有さない。だが、鉱山街の整備や鉱山関係の投資増大による間接的な都市部の経済的繁栄は、牧民の中でもそれを享受できる人々、具体的には学齢期の子女や高齢者を都市部に住まわせるための住居が購入可能な程度の家畜数を有する階層にとっては、社会主

義の崩壊とともない希薄化した都市空間とのリンクを強化する契機として機能した²⁾。

ただし、余剰人口のウランバートルへの集中、鉱山開発、非労働人口の定住地域への居住といったファクターは、もちろん完全に同一ではないといえ、社会主義時代の開発政策と同一の方向性であり、むしろある種の連続性の回復として理解すべき現象であろう。また、単に家畜数が多いだけでない、経済的に「裕福な」牧民層の出現は、自らの家畜や畜産品を換金するルート、つまり流通システムの再構築が進行しつつある状況の結果である。

無論、少なくともモンゴル国に関する限り、再構築されつつある流通システムは社会主義時代ほど末端まで行き届いておらず、またきめ細かく社会的弱者への配慮がなされているわけでもない。だが、21世紀に入ってからモンゴル牧民社会の状況を、1990年代と同一の「ポスト社会主義」という用語で括ってしまうとすると、それは社会主義崩壊の前後の差異が、1990年代と2000年代の差異よりも質的に異なり、前者が圧倒的に大きな断絶なのだという認識の表明に他ならない。

しかしその認識法は、確かにモンゴル牧民社会に住む人々が、仮に間接的な過去である集団化以前から存在する牧畜知識といったリソースを社会主義崩壊後現在に至るまで、より積極的に活用するようになってきているかもしれないにせよ、その一方で直接的な過去である社会主義時代の各種の「遺産」にも縛られつつ、あるいは時にそれを利用しつつ生きているのだという、ごく当たり前の事実を隠蔽してしまうという問題をはらんでいる。

そもそも「ポスト社会主義」なる用語は、渡部（2005：23, 26）が「ポスト社会主義経済下のトナカイ飼育産業」と題する論文で、ベレストロイカ以後、カムチャツカの先住民が「トナカイ肉の販売システム、輸送システムをうまくはたらかせることができなかった」故に「トナカイ肉から収入を得られない状況」に陥り、「トナカイ肉の販路や輸送、加工を含めた流通システムを構築」することが課題であると指摘しているように、少なくとも生業関連の研究においては元来、社会主義つまり集団化体制の崩壊に続く一連の経済混乱やそれに起因する自給性の高い生活形態への「撤退」というニュアンスを元来有していたように思われる。また、少なくともそれが、通文化的な共通経験であったといえよう。

だとすれば、モンゴル牧畜社会にとってのポスト社会主義的状况は2000年頃を境に、一応の終焉を迎えたと理解することができる。即ち現在は、少なくともある部分においては確実にポスト「ポスト社会主義」的状况に突入しているのだ、と。なお、こうしたポスト「ポスト社会主義」的状况は、ロシアにおけるエリツィン時代とプーチン時代の直感的な対比でも想像可能なように、他地域との比較可能性も有するアイデアであると思われる。しかし、本論ではあえて議論を横方向、つまり比較や一般化を志向する方向へは展開せず、議論の対象を現在のモンゴル牧畜社会に限定した上で、さらに問いを進めていきたい。

それでは、モンゴル牧畜社会におけるポスト「ポスト社会主義」的状况は、上述したような、社会主義時代以来の社会変化のベクトルへの回帰に尽きるのだろうか。当然、それは否である。今やすでにポスト社会主義とは呼べないとはいえ、社会主義もすでに過去の存在である。ポスト社会主義的状况が単純に社会主義以前（もしくは集団化以前）への回帰とはならなかったのと同様、そこには幾多の相違を挙げる事が可能である。

そこで、以下ではその中でも最も象徴的と思われる、「郊外化現象」について論じることとする。なお、モンゴル牧民社会の「郊外化現象」という用語法は筆者のオリジナルであり、具体的には、都市的空間の近郊に家畜放牧による自立的な生活が可能で牧民が集中していく現象を指す。そこでは、都市がもたらす各種のメリットを享受すると同時に自らは都市近郊の草原で牧畜により主たる生計を支える人々が生活しているが、こうした生活スタイルは社会主義時代には想定も許容もされてはいなかったと思われる。

また、ポスト社会主義時代にも、首都ウランバートル近郊で多少の家畜を飼育し、牛乳や馬乳酒などを市内の市場で販売することで、家畜の生体販売に起因する頭数減少を回避しつつ生活を維持する人々が出現していたことは事実である。だが、何より郊外化現象では都市の生活水準を可能な限り草原へ「持ち出そう」と志向しているように見える点で、それまでの時代に出現した現象とは一線を画すると思われる。それでは、郊外化現象の歴史的な位置付けなどは本論末の考察で再び試みる事として、まずは議論のベースとなる具体的な事例について報告したい。

3 フィールド概要

本論で取り上げる事例は、モンゴル国の北部、首都ウランバートルから西北西へ直線距離で約280キロ離れた、ボルガン県ボガト郡の南端の草原に位置する一角である。筆者は2007年3月と8月、および2008年3月に、短期間の現地調査を行った³⁾。

現地の特徴を簡単に述べると、1) ボルガン県中心部の都市的空間からほど近い自然空間に、2) 幹線道路およびそれと並行する小川に沿って北西＝南東方向に広がる河谷平原を中心とする牧民社会が形成され、3) 牧民の空間利用の特徴としては限られた水源とその周囲の草原に依存した、回数的にも距離的にも季節移動性が低い居住地移動をベースとした牧畜が展開されている、とまとめることができる。以下では、さらに詳細にフィールドの状況について検討を加える（【地図1】、【地図2】参照）。



【地図1】 調査地広域図



【地図2】 調査地域拡大図

この地域は、後述するように筆者の調査で中心的なインフォーマントであったエルデネ氏（仮名）の居住エリアを含む。より正確に述べれば、この地域はエルデネ氏らを中心的存在とする緩やかな牧民コミュニティであると特徴付けられるが、この点についても詳細は後で述べたい。なお、本論で提示する情報の非常に大きな部分は、直接エルデネ氏から、あるいはエルデネ氏の紹介によるインフォーマントから得られたものである。

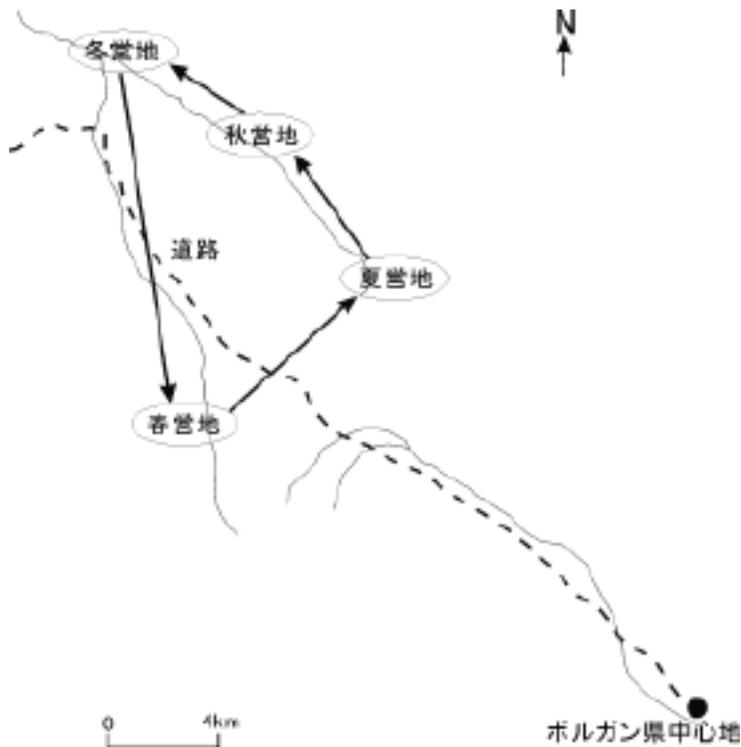
もちろん、こうした特定個人を中心とする「情報圏」に依拠した形で民族誌的データを構築することの問題性に筆者は無自覚であるわけではない。場合によっては、それはデータの「偏り」として議論の前提自体を揺るがしかねない。しかし、本論で言及するケースに関する限り、エルデネ氏のプレゼンスは他のインフォーマントとは同列に扱いうる存在ではない。特に、自らの実践する牧畜や指向する生活の質について自覚的である点で、質的な差異が存在するといえる。エルデネ氏は後で論じるように、郊外化現象に代表されるポスト「ポスト社会主義」的牧畜の推進者と位置付けることができるのである。

こうしたインフォーマントから得られる情報の意味について、筆者は以下のように認識している。再び後の議論を先取りすると、エルデネ氏は少なくとも地域社会の文脈に関する限り、静態的な「ポスト社会主義」的社会構造の1パーツを構成しているというよりむしろ、ポスト「ポスト社会主義」的状况を出現させつつある動態的なアクターである。本論はまさにこうした動態に注目する以上、多様なインフォーマントの平均値を求めるより、むしろ特徴的なインフォーマントに注目し、彼とその周辺をインテンシブに分析するほうが方法論的に適切であると思われる。さらにいえば、量的研究ではなく質的研究を標榜する文化人類学の調査方法において、サンプル数の多さや各種統計処理に依拠するのではない「代表性」のあり方を考える場合、こうした特徴的なインフォーマントに注目した議論は積極的な意味を見出しうるのではないだろうか。

さて、エルデネ氏の冬営地はボルガン県中心部から北西に15キロ離れた地点に存在するが、彼の冬営地を含め、調査地一帯は県中心地に立てられた携帯電話のアンテナ塔からの電波も届く距離である。現地はボガト郡に属するが、県中心地の都市空間およびその周辺エリアはボルガン郡に属する。両者の境界は、県中心地とエルデネ氏の居住エリアのほぼ中間点にあるボルガン県の空港⁴⁾の、滑走路の北端付近に存在する。

ボガト郡は社会主義時代より、牧畜を主たる産業として行う地域、つまりネグデルであった。ただし、社会主義時代のボガト郡という行政単位における牧地という文脈で現地を見ると、むしろその周縁性がクローズアップされることになる。

本調査地域は、ボガト郡の第2バグ（村）に所属する牧地である。社会主義時代には第2ブリガードと呼ばれていたが、基本的にその空間的広がりには現在に至るまで同一である。ただし1980年代の牧地利用の状況をエルデネ氏からの聞き取り調査で確認したところ、【地図3】のようであることが判明した。すなわち、調査地は第2ブリガード



【地図3】 1980年代の土地利用（ボガト郡第2ブリガード）

の春营地エリアの東端に位置し、主たる季節移動は筆者の調査地域の北西にある峠を越えた、北西方向へ流れていく川沿いで行われており、南東に流れていくこの小川の流域は主たる牧地としては利用されていなかったのである。

この理由は定かではないが、筆者らの観察では草原の質および量が北西側に比べて相対的に劣る上、ボガト郡（つまりネグデル）中心地からは離れているため、積極的にこちら側へ展開する理由がなかったものと思われる。また、社会主義時代には家畜の出荷はネグデルが行っていたため、現在のように個人レベルで都市の近くに居住するメリットは存在しなかったし、いずれにせよネグデルの指導を無視して牧地を選択することも不可能であった。例外的な存在は、夏季の搾乳を目的としてボガト郡のネグデル指導下にあった農牧業組織「ファーム」であり、現在のエルデネ氏の秋营地付近でウシとウマの搾乳を行っていたという。この組織は、ボルガン県中心地などの都市的空間に原料乳を供給する目的の組織であったことが想像されるが、エルデネ氏によれば規模は小さく、またファームの家畜と牧民は現地に根付かずネグデル解体直後には雲散霧消したという。

なおこの地域では社会主義時代、夏季には水へのアクセスの良い川沿いを中心として、

ボルガン県中心地に住む都市住民が所有する少数の家畜も、ボガト郡の領域内でも放牧されていたという。ただし、都市住民が自ら家畜を放牧するのはバカンス期間に相当する夏季に限られ、それ以外の季節には専業牧民である親族・友人などに預託されるのが常であるため⁵⁾、いずれにせよ現地は社会主義崩壊直後の状況では、ボガト郡の牧民およびボルガン郡の都市住民によって季節的には利用されるものの、全般的に利用度の高くない、周縁的な牧地であったといえるだろう。

この事実は裏を返せば、社会主義崩壊以後に居住地選択の自由度が広がった際、人々からこの地域が「先住権を主張するだろう旧来の牧民が希薄」かつ「他所者の放牧が許容される」牧地として認識され、そして事実移住の対象地となる条件が、はからずも社会主義時代に整ったことを意味する。実際問題として、法律上は誰がどこで放牧しようと自由であるはずの現在のモンゴル国牧畜地域においても、別の行政単位（県、郡、村）に所属する牧民の牧地利用を排除しようとする行政関係者や地元の牧民は珍しくない⁶⁾。ところが、この調査地域一帯においては牧民が季節的あるいは長期的に、自らの所属とは異なる行政単位に所属する牧地を自由に利用することが許容されている。

例えばエルデネ氏は、住民登録の上ではボルガン郡第2バグであるが、通年ボガト郡第2バグの草原で放牧し、冬営地と春営地に関してはボガト郡政府から土地の占有許可まで取得している。この占有許可は、各営地とその周辺5ヘクタールほどの土地を2006年から30年間、牧地として利用できるというものであり、エルデネ氏にはその旨の証明書が発給されていた。エルデネ氏の説明では地元の牧民であれば60年間の占有申請をしているところを、他所の郡に属するため遠慮して30年間で申請したとのことであったが、60代後半というエルデネ氏の年齢を考慮すれば、占有年数の短さは実質的な意味を持っていないといえよう。

さらにこの地域が幹線道路沿いであるという事実は、ネグデルの解体以後には非常に大きな意味を持つようになった。この幹線道路はボルガン県から北西に隣接するフブスグル県へと続く道であり、モンゴル国としては非常に交通量が多い部類に属する。調査当時、ウランバートルから現地まではモンゴル国第2の都市ダルハン、第3の都市エルデネトを経由して、ボルガン県中心地まで完全に舗装道路のみでアクセス可能であり、フブスグル県までも舗装工事が着手されつつある状況であった。

エルデネトからボルガン県中心地までの舗装が完了したのはつい最近のことであるとはいえ、当地域は、県中心地までのアクセスが非常に良好であるばかりでなく、ウランバートルをはじめとする諸都市へのアクセスも良好である。この点は、マーケットや各種サービスの供給地としての都市への接近を嗜好する現在のモンゴル牧民にとっては、非常に魅力的な条件となることはいうまでもない。

ただし、ある草原を牧地として使用するには水源、特に家畜用の水源が不可欠である。もちろん、井戸を掘れば水の出る地域であれば基本的な居住条件はクリアするのである

が、そのコストや井戸水をくみ上げて家畜に与える労力を勘案すると、川や泉などの水源が存在するほうが望ましい。その点この地域は、地勢的には水に恵まれた山岳性森林ステップと平原の境界に位置する。具体的には西側の山地に端を発し、ボルガン県中心部へ流れ下る小川の上流域に相当し、この小川が手軽な水源として利用可能となっており、現地の人々は山中の森林を流れる水を飲料水として利用し、その下の草原を流れる水を家畜用に利用している。

2007年8月に筆者が現地調査を行った際には、前月中旬以降より干ばつとなり、雨の多い年なら出現する地表の水溜りはおろか、小川そのものもボガト郡内で水が消失する状況であったが、上流部には乏しいながら水は流れ続けており、周囲の家畜群は全てその小川から水を得ていた。このような、各種の社会的・自然的条件の好適さの上に、この地の郊外化現象が進行したといえるだろう。

4 牧民の生活実態

それでは、具体的にこの地域に、どのような人々が居住しているのだろうか。まずは、すでにたびたび言及しているエルデネ氏について、そのプロフィールを述べたい。

エルデネ氏は2007年3月の調査当時66歳で、ヒツジ・ヤギ200頭、ウシ100頭、ウマ100頭ほどを有する牧民であり、その一方で年金受給者でもある。つまり、彼はかつて給与所得者だったのであり、ネグデル時代以来の牧民ではない。出生地はボルガン県内だが、モンゴル国立大学を卒業後ボルガン県の气象台に長年勤務し、最後はボルガン県の空港長となって2003年に退職後、牧民となったという経歴の持ち主である。エルデネ氏の妻もモンゴル国立大学を卒業後、1995年まではボルガン県中心地で中学校の教員をしており、退職後は夫に先んじて年金を受け取りながら牧民となった。なおエルデネ氏には3人の子供がいるが、3人ともボルガン県中心地在住の公務員であり、草原のゲルに通年居住しているのはエルデネ氏夫婦のみである

エルデネ氏の生活拠点は、調査地域内では西北に位置する冬営地と、その東2キロほどにある秋営地⁷⁾であり、いずれにもゲルと併用される固定家屋が存在する。ただし、エルデネ氏夫婦は基本的にゲル居住で、所有する耐久財も、韓国製乗用車や発電機、携帯電話、草刈り用トラクターなどエルデネ氏が牧畜経営に必要であると判断したものは他の牧民以上に充実している一方、テレビは白黒であるなど、娯楽用の物品や奢侈品は極端に少ない。ただし、彼はボルガン県中心地との間を頻繁に往復しているので、そうしたものがもし必要であれば県中心地に住む子供たちの家に置いておけばよい、という事情も存在する。

エルデネ氏は、牧民であるとはいっても、現在自ら牧畜労働に従事することはほとんどない。彼はヒツジ・ヤギ群に1名、ウシ群に1名、ウマ群に1名、合計3名の牧畜

労働者を雇用しており、エルデネ氏の指示の下、放牧・搾乳・毛刈り・群の季節移動といった労働は全て彼らの手にゆだねられている。雇用形態は畜種ごとに異なるが、牧畜労働者はおしなべて若く、世帯単位でエルデネ氏の営地に居住しているため、一見すると雇用関係のない「普通の」ホトアイル（宿营地集団）と区別はつかない。なお、エルデネ氏によれば自らは気象台勤務時には牧畜気象を専門としていたため常に牧民と接触していたので、牧畜のやり方についてはその頃に現場の牧民から学んだ知識が活かされているとの事であり、現在も牧畜労働に関する判断は全てエルデネ氏が行っている。

エルデネ氏によれば、調査地近辺では牧畜労働者の雇用事例は少ないとの事であったが、自身は先のゾドで家畜を失った20代後半～30代の若い牧民に雇用機会を与える目的で2003年から雇用している。その結果、彼は自らの居住地以外の場所に畜群を展開することが可能であり、実際にそうした牧地利用を展開している。次に、季節移動や牧草確保と絡めたエルデネ氏の畜群展開について述べる。

エルデネ氏は、11月から7月まで冬営地に、それ以外の時期は秋営地に居住している。一方、畜群の移動は複雑であり、ウシとヒツジ・ヤギは冬営地を5月に離れ秋営地へ移動した後、ヒツジ・ヤギのみさらに7月から初秋まで、秋営地から東に3キロの夏営地へ移動する。さらに、ウマの移動は完全に人の移動とは独立しており、冬季は冬営地の北西3キロほどに位置する春営地に滞在し、夏は冬営地から北へ13キロほど離れた草原で放牧が行われている。当のエルデネ氏は各放牧地を自家用車で適宜移動し、状況を視察し牧畜労働者に指示を出し、場合によっては馬乳酒などの畜産品を自分の居住地まで持ち帰る生活をしている。また冬場の草不足を補うための干草は、2007年の場合、冬営地から北北西へ17キロ離れたボガト郡の牧民の冬営地近辺から4トンほど確保した。なお草刈りに際しては現地の牧民と交渉して、彼らの分の草刈りも請け負うという交換条件を取り決めた後にトラクターを持ち込み、草を確保していた（【地図4】）。

このように、エルデネ氏は自ら「半定住」と認識する居住地の短距離季節移動と、牧畜労働者を雇用しての畜群の比較的長距離な季節移動を組み合わせているが、彼が牧畜経営で最も重視している畜種は、ほとんどの期間エルデネ氏の住居から離れないウシである。エルデネ氏の牧畜経営の戦略はウシの多頭飼育、特に牛乳の加工場への販売を中心とした酪農的なものであり、かつて同氏の妻が1人で牧民をやっていた時期は、現在以上にウシの占めるウエイトが高かったという。そもそもヒツジにはあまり向かない草種が多い山岳ステップに近い草原を居住地として選択した理由も、彼がウシを中心に牧畜を考えていたためである。エルデネ氏によれば、現在一番収益の上がるのはウシであるといい、彼はウシに特化することによって、2007年2月にソムで一番多くの仔ウシを育てた牧民として運輸大臣から表彰のメダルを贈呈されている。

またエルデネ氏は、国家レベルでも有名な牧地私有化論者である。エルデネ氏は、彼の営地の近辺は、県の中心地に近いため経済・病院・学校の関係から居住者が増えてい



【地図4】 エルデネ氏の土地利用

るという認識を持っている。そして一部の牧民が「適当に草原を使って、荒れたら別の場所に行けば良い」といわんばかりの発想で放牧している実態に危惧を抱き、頭数に応じて政府が牧地を割り当てるスタイルの牧地私有化を主張し、2007年初頭にはウランバートルでテレビに出演し、自説を展開したという。

牧地私有化が現実には草原の保護に役立つか否かという議論はともかく、結局のところ2007年春の国会では牧地の私有化に関する法律は上程されず、牧地は現在なお共有のままである。筆者は2007年8月の調査の際、エルデネ氏の冬営地（当時居住者なし）のすぐ近くでウシの放牧をしている牧民と干草用の草刈をしている人々を見かけたが、同氏の妻は「冬に自分のウシが食べる草がなくなって困るが、社会主義時代のように強制的に退去させることもできない」と苦々しく語っていた。

5 郊外牧民集落

エルデネ氏によれば、こうした牧民たちはボルガン県の市場へのアクセスがよい当地

へ、夏場のみ家畜を連れて移動してきている人々であるという。彼らはゲリラ的に適当な草地で家畜を放牧しつつ牛乳などを販売し⁸⁾、冬になると遠隔地の冬営地へ戻っていくのだという。だが後述のように、この地域で放牧をしている牧民、特に河谷平原の中央部を利用している牧民は、多くが年間を通じてこの近辺で放牧している。また、それにもまして興味深い点は、エルデネ氏の語りを裏付けるように、彼らがほぼ例外なく社会主義崩壊以降ここへ移住してきた外来者である、という事実である。

筆者は2007年8月の調査の際、この河谷平原に秋営地を構える牧民世帯で聞き取り調査を行った。空間的広がりとしてはエルデネ氏の秋営地を含む半径約2キロの圏内であり、ここに15ホトアイルほど（エルデネ氏および同氏の牧畜労働者を除く）が存在した。そのうち、筆者は【地図5】で示す地点の12世帯（10ホトアイル）において牧畜経営の現状や過去の来歴に関する簡単な聞き取り調査を行い、【表1】のような結果が得られた。

なお家畜頭数欄のSGはヒツジ・ヤギ、Cはウシ、Hはウマを示し、ラクダの所有者はゼロであった。またインフォーマントのうち、No. 3, 5, 8は年金受給者であり、



【地図5】 インフォーマントの分布

【表1】 インフォーマントの来歴など

No.	年齢	旧居住地	移住年	家畜頭数	旧職業
1	40代	フブスグル県	1993	SG100/C20/H23	ND（牧民以外）
2	60代	ヒシグウンドゥル郡	2000	SG98/C8/H15	牧民（1965～）
3	60代	県中心地	1998	SG429/C60/H2	獣医
4	40代	県中心地	1996	SG580/C72/H1	建設労働者
5	60代	県中心地	1993	SG118/C34/H1	獣医
6	50代	県中心地	2000	SG500/C60/H30	電気技師
7	60代	バヤンアクト郡	40年前にボガトへ	SG52/C9/H1	牧民（40年間）
8	60代	バヤンアクト郡	2001	SG50/C14/H1	牧民（1998～）、 以前は村の獣医
9	40代	県中心地	1997	SG160/C16/H2	軍人（建設隊）
10	60代	テシグ郡	1994	SG47/C3/H18	牧民（若い頃から）
11	30代	ホタグウンドゥル郡	2004	SG100/C28/H24	牧民（1990～）
12	30代	県中心地	1997	SG200/C50/H10	トラクター運転手

そのうち No. 3, 5 はエルデネ氏と同級生で、3 人とも県中心地の10年学校（高校）を卒業後、ウランバートルで高等教育を受けてボルガン県に戻ってきた経歴を共有する旧知の間柄である。

これを見て明らかなことは、県中心地から当地へ移住してきた人々のほうが他の牧畜地域から移住してきた人々より、おしなべて牧民として裕福であることである。例えば、モンゴル国で家畜の財産評価法などに採用されているヒツジ単位（Standard Stocking Unit）の換算率、すなわち「ヒツジ1、ヤギ0.9、ウシ5、ウマ6、ラクダ7」（Humphrey and Sneath 1999: 42, 309）を援用すると、特に No. 3, 4, 6 はエルデネ氏に次ぐ富裕層を形成していることがわかる。また、No. 7 以外のインフォーマントが1990年代以降にボガト郡内へ移住しており、No. 7 も社会主義時代には森林伐採のため各地を転々としていたので、ここで取り上げた牧民は全て社会主義崩壊以降、現地に移住してきた外来者であると述べても差し支えない。

一方、移住理由については逐一ここで検討することはしないが、この草の状態が良好であったことに加え、病院や子供の学校といったインフラへのアクセスの良さ、交易の便利さや都市での雇用機会など経済的理由が挙げられていた。ただし比較的若い世代の元都市生活者である No. 4, 6, 9 に関しては、失業など都市の経済的困難を一樣に理由の1つとして挙げていたので、雇用機会については検討の余地があると思われる。なお、年金受給者は皆、「年金が出たので牧民になった」と語っている。

また、彼らの冬春営地の位置も特徴的である。No. 1 と 2 が北東方向3キロほどの地点へ移動し、No. 11が北へ15キロほどの地点へ移動する以外は、調査地域の範囲から外れない領域に冬春営地を構えている（【地図6】）。つまり少なくとも県中心地から



【地図6】 インフォーマントの冬春営地への移動

の移住者は、居住地のレベルでは通年、皆がこの地域内で季節移動をしているのである。しかも、No. 12がエルデネ氏の冬営地から北東へ900メートルの地点に冬春営地を構えている以外、全てエルデネ氏の冬営地から北東へ3キロの地点に集中して冬春営地を構えており、その光景はさながらウランバートル近郊の住宅地（ゲル集落）のようである。

また、No. 12の冬春営地も4ホトアイル分の家畜囲いが設置されていることから、今回聞き取りを行わなかった調査地域の牧民のうち、ここで越冬する者が存在することが想像される。むしろ、この地域では、エルデネ氏のように他のホトアイルと少し距離を置き、独立して冬春の営地を構える方が珍しい事例に属する。ただし、筆者の聞き取り調査は全てエルデネ氏の同行および紹介の下で行われており、またエルデネ氏と他のインフォーマントとの話しぶりからも、エルデネ氏と彼らとの間に一定の、日常的な往来が存在することが想像される。無論、その中でも親しい関係であったのは10年学校での同級生だったNo. 3, 5であり、他のインフォーマントにとっては、同行した運転手の言葉を借りれば「長老のような」、敬しつつも気安く話せない存在のようであった。なおモンゴル国では、高等教育を受けた「知識人」が牧民となる事例は稀なので、エル

デネ氏と No. 3, 5 が「長老グループ」を形成するのはある意味、自然であると思われる。

このように一部遠隔地からの、しかも比較的近年の移住者に関して例外はあるものの、現地は外来者が河谷平原内で季節移動距離の短い牧畜を行う社会圏を形成している。そして、社会的にも経済的にも県中心地から移住してきた旧都市住民が中心的存在であり、彼らは牧畜による収入と都市空間の各種利便性の双方に目配りをしながら生活しているとまとめることができよう。

6 考察と展望

最後に、再び上述の郊外化現象のポスト「ポスト社会主義」性について考えてみたい。1つのポイントとなるのは、彼らがモンゴル国で家畜私有化が行われた1992年前後にすぐ牧民化したというより、モンゴル国のポスト社会主義的状况の中から徐々に牧民として「析出」してきたと考えられる点である。

ただし、この問題を検討する前提として、かつてボルガン県中心地の居住者で牧民化した人々が全て郊外に集まっているわけではない、という点を指摘しておく必要がある。例えば、2007年8月の調査で筆者は、エルデネ氏の冬营地から西へ30キロの地点に夏营地を構える牧民プレブ氏（仮名、50代）を訪問する機会を得た。彼は社会主義時代には県中心地在住の運転手であったのが、家畜私有化の開始とともに家畜を得て牧民になったという経歴の持ち主である。現在、プレブ氏はヒツジ・ヤギ1,400頭、ウマ150頭、ウシ100頭を擁する、国家レベルでも有数の家畜頭数を誇る牧民である。筆者は、プレブ氏については予備調査といえるほどの情報も持ち合わせていないのが現状であるが、訪問直後に控えていた秋营地への移動では山を迂回する形で東南東へ30キロ移動するとのことであった。

プレブ氏の場合、夏营地は県中心地から50キロ近く離れているため、当然携帯電話の電波は届かない。また、春营地も山を越えた南東方向にあり、ホトアイルの年間移動は本論で言及した郊外牧民集落と比較すれば圧倒的に長距離である。むしろこういった牧畜は、ネグデル解体時に家畜の配分を受け「自営牧民」となった旧ネグデル所属の牧民が行っている牧畜のスタイルときわめて類似している。

彼のケースでは所有家畜頭数（特にヒツジ・ヤギ）の多さゆえ、比較的人口密度の高い郊外牧民集落で牧畜を行うのは牧地への負担を考慮して困難であるという、環境面のみからの移動パターンの理由付けも可能ではある。だが、筆者が1990年代末にモンゴル国南東部で行った調査事例でも、社会主義崩壊直後に牧民化した元定住民は家畜頭数の多寡に関わらず、基本的にネグデル時代から牧民を続けていた人々と同様の季節移動パターンで牧畜を行っていた（尾崎 1999: 64-76）。つまり、当時の元定住民は、基本

的に旧来からの牧民をモデルとし、彼らと類似したスタイルの牧畜に参与する形で牧民化していったのである。仮にこれを、社会主義崩壊直後に出現した牧畜の様態であるという意味でポスト社会主義的牧畜と呼ぼう。

ポスト社会主義的牧畜は、すでに指摘したとおり、家畜の所有体制や季節移動ルート・居住地選択についてネグデル体制下の牧畜とは差異が存在する。しかしその一方で、ネグデル時代以来の牧民の中には、季節移動のパターンがポスト社会主義時代においても基本的に同一なケースも少なからず存在する。特に冬营地や春营地など、家畜囲いや井戸といったインフラが存在する营地については、社会主義時代に利用されていたものを個人が継承して利用し続けることが珍しくない。そうした点を考慮すると、ポスト社会主義時代の季節移動や营地選択のロジックは、元来の牧民と元定住民、あるいは社会主義崩壊の前後における营地の地点変化といった表面上の差異に関わらず、基本的にネグデル時代、あるいは集団化以前の様態が参照点であった、ということができよう。

一方、郊外化のロジックは、ライフスタイル全般としては都市と不即不離の関係構築を志向しているという点で、根本的には社会主義時代の発展観を継承しているといえる。恐らくそれは、郊外化現象の中心的存在は、かつて都市空間で労働者として生活していた人々であるという事実と関連するであろう。ただし、牧畜を行う空間の選択においては都市近郊という、ネグデル時代には選択し得なかった地域に入り込むことに成功している点で、過去への参照にはこだわりを見せていない。この1点において、この現象はネグデル的牧畜とも、ポスト社会主義時代的牧畜とも一線を画す。つまり、ポスト「ポスト社会主義」的と形容するに値するといえよう。そしてこうした新しい様態の牧畜の出現こそが、モンゴル牧畜社会のポスト「ポスト社会主義」的状况への突入を象徴的に表現しているのではないだろうか。

それでは、こうした違いが一体何に由来するのか、筆者は現時点では明確な回答を持ち合わせているわけではない。ただ、本節冒頭で指摘したように、少なくとも出現する時期の違いをそこに見出すことは可能だろう。つまり、社会主義崩壊直後に出現した牧畜のスタイルと、「ポスト社会主義」的な社会状況を実際に経験する中で形作られてきた牧畜のスタイルという違いである。後者、つまりポスト「ポスト社会主義」的な牧民は、果たして社会変化の趨勢を見極めた上で満を持して出現したものか、あるいは社会変化の中でやむにやまれず出現するに至ったのか、という問題については今後の検討課題であるものの、彼らの牧畜における「伝統」あるいは「自由」といった概念に対するスタンスの独自性は、この経験の中から生まれてきたものではないかと推測される。

また、他にも残された問題はある。筆者がすでに行った短期間の調査では、郊外牧民集落に居住する牧民の、居住地の移動パターンはある程度フォローしたものの、家畜群の移動パターンについては明らかにはなっていない。エルデネ氏の事例でも明らかのように、家畜群の移動パターンは必ずしも居住地のそれと一致している必要はないのであ

る。なお家畜群の移動については、聞き取り調査や観察による経路のトレースという従来の方法に加え、GPSの小型化・高性能化にともない、サンプル家畜に取り付けたGPSのログデータを解析する方法によっても明らかにできるようになりつつある。こうした現状をふまえ、郊外牧民集落における家畜群の移動に関する詳細な実態解明、そして都市から離れた地域でのポスト社会主義的牧畜の変容に関する実情把握と、多角的な比較に基づく両者の関係性および断続性の究明などが、当面の課題として挙げられる。

さらに、モンゴル国と同様、1990年代に「ポスト社会主義」的状况を経験した他の社会との比較を通じた、ポスト「ポスト社会主義」概念の応用性に関するさらなる検討も必要であろう。もちろん、この点は筆者が独力で解決できるものではないが、今後の研究課題として指摘しておきたい。

注

- 1) 当時のモンゴル国牧民が、中国領内モンゴルと比較して自給性の高い生活を送っていた事実は別稿にてすでに指摘した通りである(尾崎 2004: 98-106)。
- 2) 具体的な事例報告については拙稿(尾崎 2006: 207-208, 216-217) 参照。
- 3) 本調査は明治大学乾燥アジア研究所の共同研究「モンゴル高原の自然環境と遊牧」(代表: 森永由紀)の一環として行われているものである。また、2008年3月の現地調査に関しては、鹿児島大学法文学部平成19年度若手研究者研究支援事業「モンゴル牧民社会の『郊外化』に関する実証的研究」(研究代表: 尾崎孝宏)の一環として行われた。
- 4) 空港とはいっても、現実には草原をフェンスで囲っただけの未舗装滑走路が一本あり、滑走路脇に管制塔とターミナルビルを兼ねた建物と気象観測機器が並んでいるだけの施設である。
- 5) 都市住民など定住者の家畜預託については拙稿(尾崎 2004: 97-98)を参照。
- 6) 具体的な事例については拙稿(尾崎 2006: 213-216)を参照。
- 7) 営地名はエルデネ氏の自称に基づいており、その営地が実際に利用される季節とは必ずしも一致していない。
- 8) 自ら自動車を所有しなくとも、交通の便のよい場所に居を構えていれば自動車などで商人や一般の人々が直接牧民のところへ畜産品を買い付けに来ることは珍しくない。

文献

Humphrey, C. and Sneath, D.

1999 *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*. Durham: Duke University Press.

西垣 有

2005 「ウランバートル市の『起源』——モンゴルにおける社会主義／ポスト社会主義の歴史叙述」『年報人間科学』26: 237-258。

尾崎孝宏

- 1999 「『現代モンゴル牧民社会の基層的単位に関する研究——スフバートル県オンゴン郡の事例』調査報告』『日本モンゴル学会紀要』29: 61-79。
- 2004 「南北モンゴルの間——内モンゴルとモンゴル国の生業論的比較モンゴル国東部牧畜地域における開発と移住』『中国21』19: 81-107。
- 2006 「モンゴル国東部牧畜地域における開発と移住」伊藤亜人先生退職記念論文集編集委員会編『東アジアからの人類学——国家・開発・市民』pp. 207-222, 東京: 風響社。

佐原徹哉

- 2004 「ポスト『ポスト社会主義』への視座——南東欧地域研究の立場から」21世紀 COE 史資料ハブ地域文化研究拠点・史資料総括班+多言語社会研究会編『脱帝国と多言語化社会のゆくえ』pp. 18-22, 東京: 東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE 「史資料ハブ地域文化研究拠点」本部。

佐々木史郎

- 1998 「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟』『民族学研究』63 (1): 3-18。

滝澤克彦

- 2006 「『宗教』のポスト社会主義』『文化』69 (3/4): 289-277。

渡部裕

- 2005 「ポスト社会主義経済下のトナカイ飼育産業——カムチャツカの現状と将来』『北海道立北方民族博物館研究紀要』14: 9-28。

